

第3節 ムラの祭祠的空間構成 －多肥地区の場合－

内田忠賢

はじめに

本報告の目的は、前々・前報告の主旨に基き、多肥地区（多肥上町・多肥下町・出作町）における伝統的な村落結合の一侧面を記述することである¹⁾。具体的に言えば、ムラレベルの祭祠的な空間構成を粗描したいと考えている²⁾。そして、その空間構成と過去のムラの領域的なまとまり（免場）との関係にも言及したい。

ところで現在3町から成る多肥地区は、近世後期から近代初頭にかけて、上多肥村・下多肥村・出作村から成っていた。明治23（1890）年に出作村の南部が百相村に合併され、同時に出作村の北部は上・下多肥村と一緒に多肥村として統合された。したがって多肥地区の中で、多肥上・下町の村落的結合は両町の境界が移動していないことと相俟って、その内容が変化し、その力が低下しながらも存続してきたと考えられる。一方、出作町は旧出作村の一部にすぎないので注意を要するが、本報告ではとりあえず出作町を含めた多肥地区を対象に検討する。

1. 現字名の旧免名

前述のように伝統的なムラの領域に関わる免場と、現大字（現在、町と呼称する、旧村）の下の字との対比を報告の基礎的作業として行う。近世に年貢率に応じて設定されたと言われる免場は、各藩政村を細分した領域であり、地神信仰を初め人々の生活上の単位に近かったと考えられる。しかし讃岐の免場に関する研究は少なく、その実態は不明と言わざるを得ない。一方、旧藩政村を継承する現在の大字（町）はさらに字に細分されている。現在、行政的には、各大字（町）ないしは3町を統合した多肥地区が基本的な単位となっている。しかし聞き取りをすると、人々は字をムラの最小領域として把える場合もあり、時には字を免場と呼び換えていると思われる場合もある。そこで現在の字と旧免場の異同・対応に注目してみたい。

多肥上・下町・出作町の字名と字の領域を第32（1～3）図に示した。字名と『東讃郡村免名録』（近世後期、以下『免名録』と略す）記載の免名などとの比較を中心に、現地調査の成果も加えて報告を進める。『免名録』の記載内容は表2に示した。

〈多肥上町、第32-1図〉

西原・中所・天満・横市・長塚・妙同石（字名は東西に分かれる）の6免名が字名として残る。また免場に含まれる小地名と一致する字名は、彦作・前邸（前屋敷）・出口の3つである³⁾。ところで松ノ内には船頭荒神がある。桜木神社（図33-1の神社1）に伝えられる天保8（1837）年の記録では荒神の境内が上所免にあるとされている⁴⁾。また出口の付近が上所免だっ

たと伝えられている。したがって上所免は松ノ内・出口の2字とほぼ一致した領域であったと推定される。

〈多肥下町・第32-2図〉

免名を伝える字名は下所の1例である。また汲仏（こんぼとけ）・津以口（ついくち）・凹原（ひっこんばら）という旧小地名が字名として残る。ところで上井戸に「下所集会所」がある。この集会所は上井戸と下所の人々が利用する。つまり下所免の領域は上井戸プラス下所の範囲に重なる可能性がある。つまり免場の生活上のまとまりが、2字に伝えられていることを推測させる。

〈出作町・第32-3図〉

西久保の一免名が残る。また西原・前原の2小地名も字名として伝わる。前述のようにかつての出作村は現在の仏生山町にその一部が属するので、他の免場は仏生山町の範囲に及ぶと考えられる。

2. 神社・地神塔

この両者はかつてのムラ生活と深く関わるランドマークと考えられる。両者の分布状況を第33（1～3）図に示した。以下、各大字（町）ごとに神社・地神塔と旧村・免場との関係を検討する。

〔表2 『東讃郡村免名録』所載の地名〕

下多肥村（免）上所免、中所免、下所免、帰来免

（小地名）法連坊、東輪、上毛、堂増、京免、地王、上ノ土居、乃上、岸ノ下、つい口、片吹、くん仏、うわえと、鳥塚、めくり、かう、ひつこん原、原ふち、辻の池、佃、小原、河奈田

上多肥村（免）上所免、中所免、下所免、西原免、天満免、横市免、妙田石免、長塚免

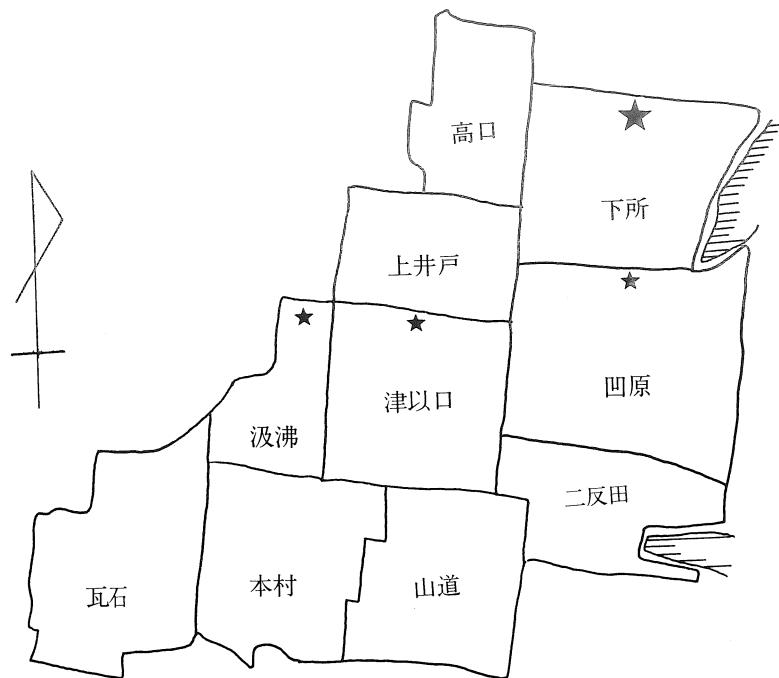
（地名）荒、彦作、前屋敷、作木、分木、野口、高木、向井、出口、北門、道ざこ、まとふ場、皿地、当石、さどう

出 作 村（免）上所免、中所免、下所免、新開免、西久保免、畠方免

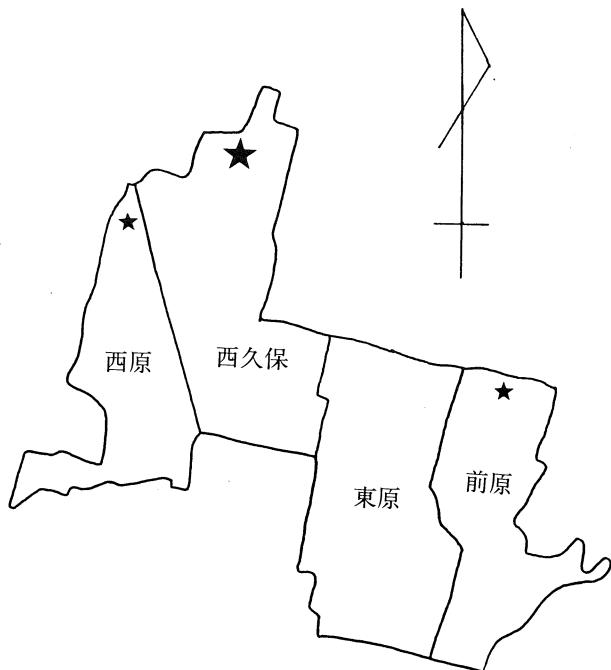
（小地名）前原、西原、松ノ上、松ノ下、志茂町



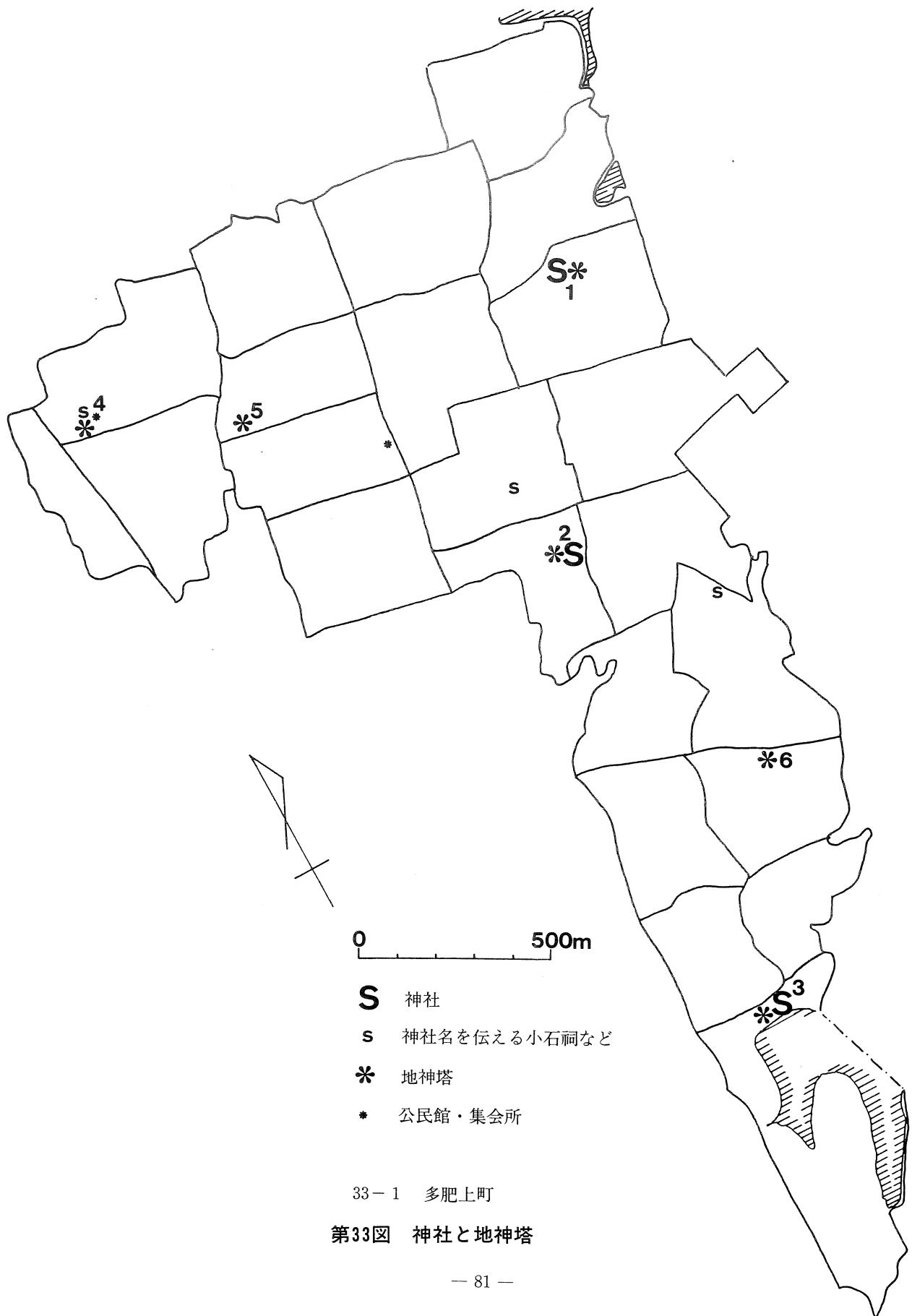
第32図 現字名と旧免名

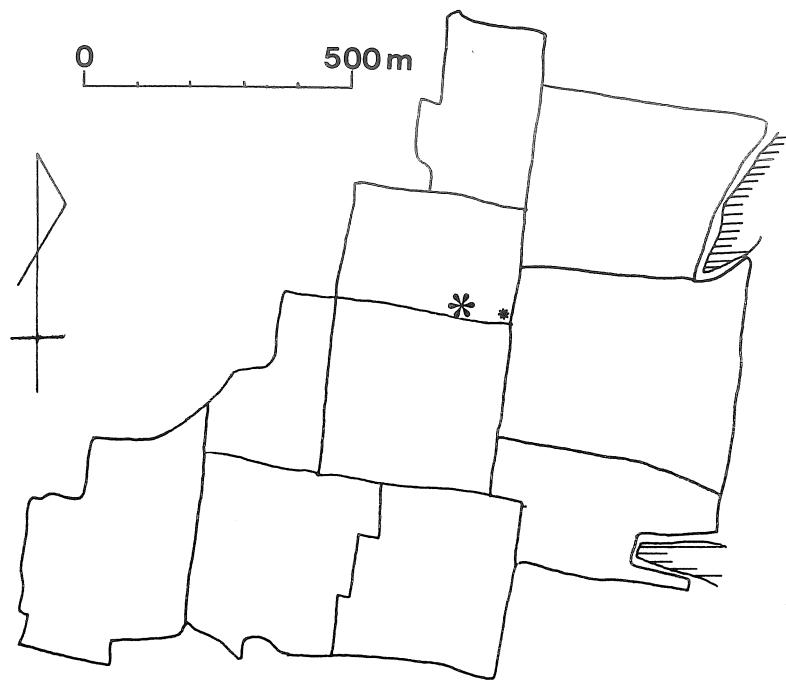


32-2 多肥下町

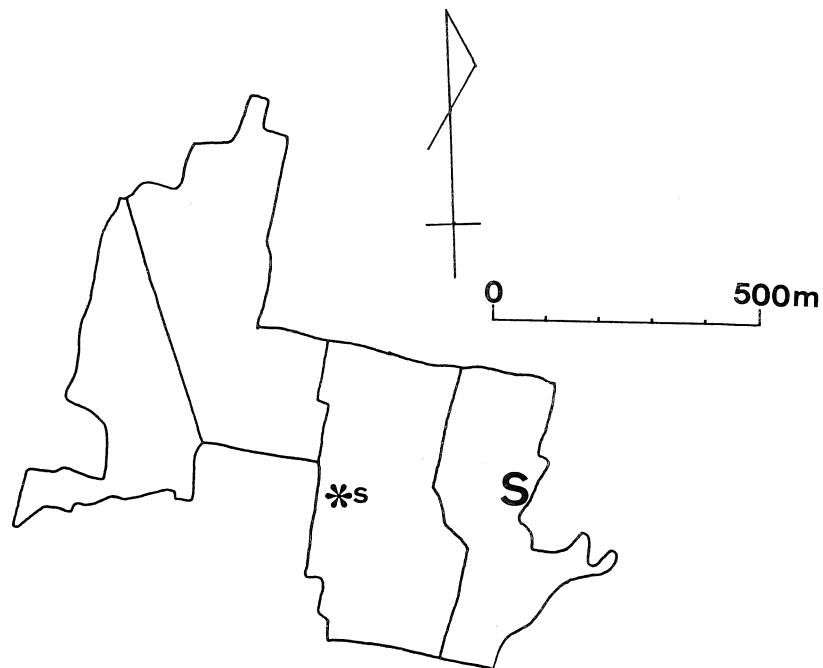


32-3 出作町





33-2 多肥下町



33-3 出作町

〈多肥上町、第33-1図〉

多肥上町には境内を持つ神社が3社ある。それは桜木・天満天・妙同石の3神社である。

桜木神社（地図中の1）は多肥上・下町の総社である。たとえば祭礼の時の頭屋（陶屋）は上・下町で例年それぞれ1名ずつがその任に当たる。頭屋役は多肥上町で「妙同石→南部→向井→出口→道佐古→上西原」、多肥下町で「本村→本村二部→下所」と南から北へ順番に移ってゆく⁵⁾。ただし編笠神楽の神楽組は神社に近い多肥上町の出口・向井が担当すること⁶⁾、神社周辺の地神塔が境内に合祀された可能性があることから、この神社は多肥上町北東部の鎮守的色彩も併せて持つと考えられる。

天満天(2)・妙同石(3)の両神社は天満免・妙同石免の鎮守であったし、現在もそれぞれ前邸・天満および東・西妙同石の鎮守とされる。

地神塔では地図中の4が注目される。この地神塔は上西集会所の敷地内に建つ。上西集会場は北原・南原・西原の人々が利用するもので、この地神塔は西原免に対応すると考えられる⁷⁾。

〈多肥下町、第33-2図〉

多肥下町には地神塔が1基残るのみである。この地神塔は上井戸にあり、上所集会所に隣接する。したがってこれが上所免の地神塔と考えられる。他の免場の地神塔は上井戸のそれに合祀されたのか、信仰と共に消滅したのかは聞き取りの限りでは不明である。

〈出作町、第33-3図〉

出作町では東原の小桜神社（於桜龍王社）に地神塔が1基のみ残る。これが西久保免のそれかは不明である。また熊野神社は出作町の総社である。

3. 小石祠

小石祠の分布は判明したものの、信仰の現状は今年度の聞き取りでは不明である。調査分で若干のコメントを記しておく。

〈多肥上町、第34-1図〉

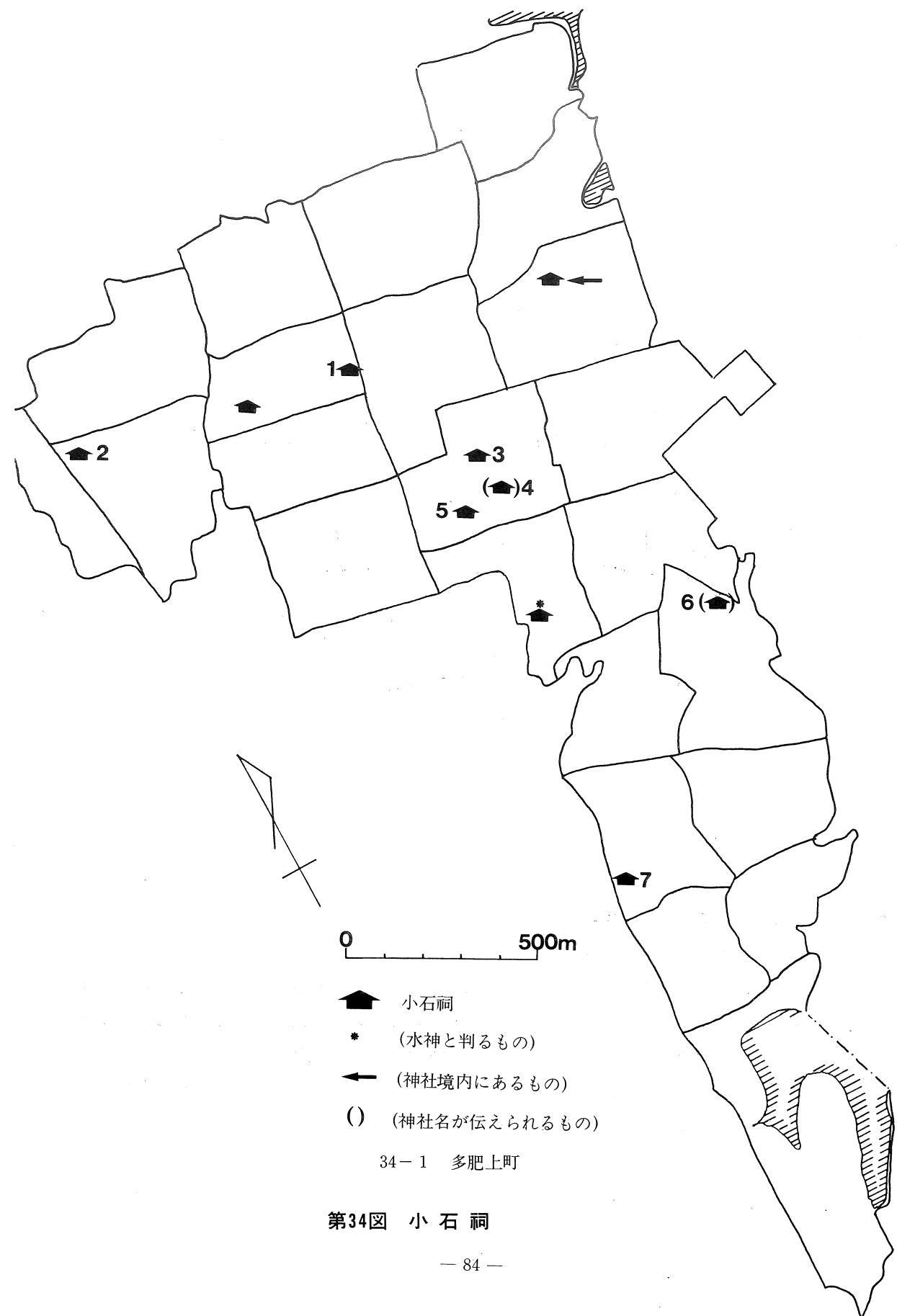
1が前述の船頭荒神。2（西原荒神）と5の小石祠はそれぞれ大井家・太田家の屋敷神であったと伝えられるが詳細は不明⁸⁾。3（御崎権現）・4（野郷神社）は野郷の人々に祭祀されている。また6・7の小石祠は庚申神社及び庚申堂と呼ばれるが、後者は立石と仏生山町旭町の人々に祭祠されているという⁹⁾。

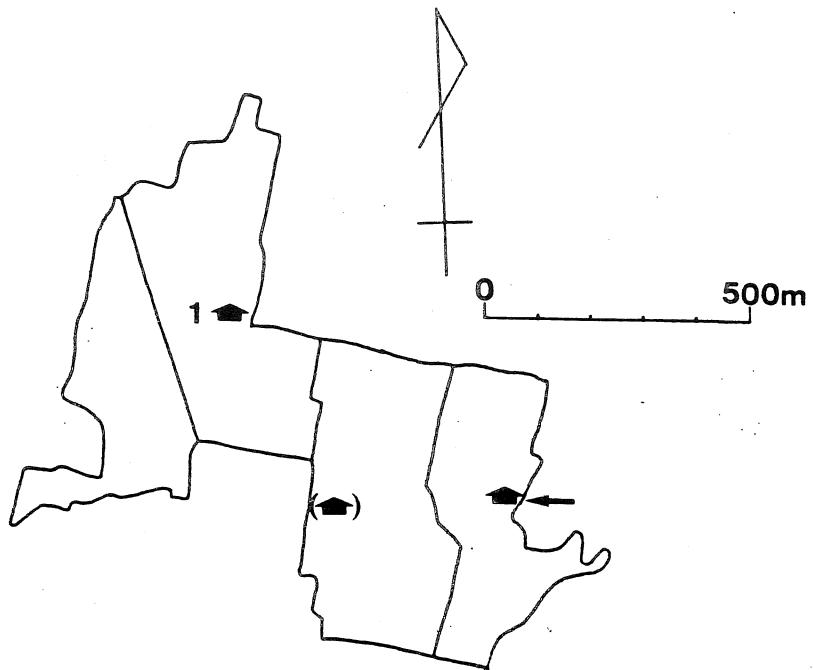
〈多肥下町〉

踏査の限り小石祠はなし。

〈出作町、第34-2図〉

1（赤塔荒神）は野口家の屋敷神である¹⁰⁾。



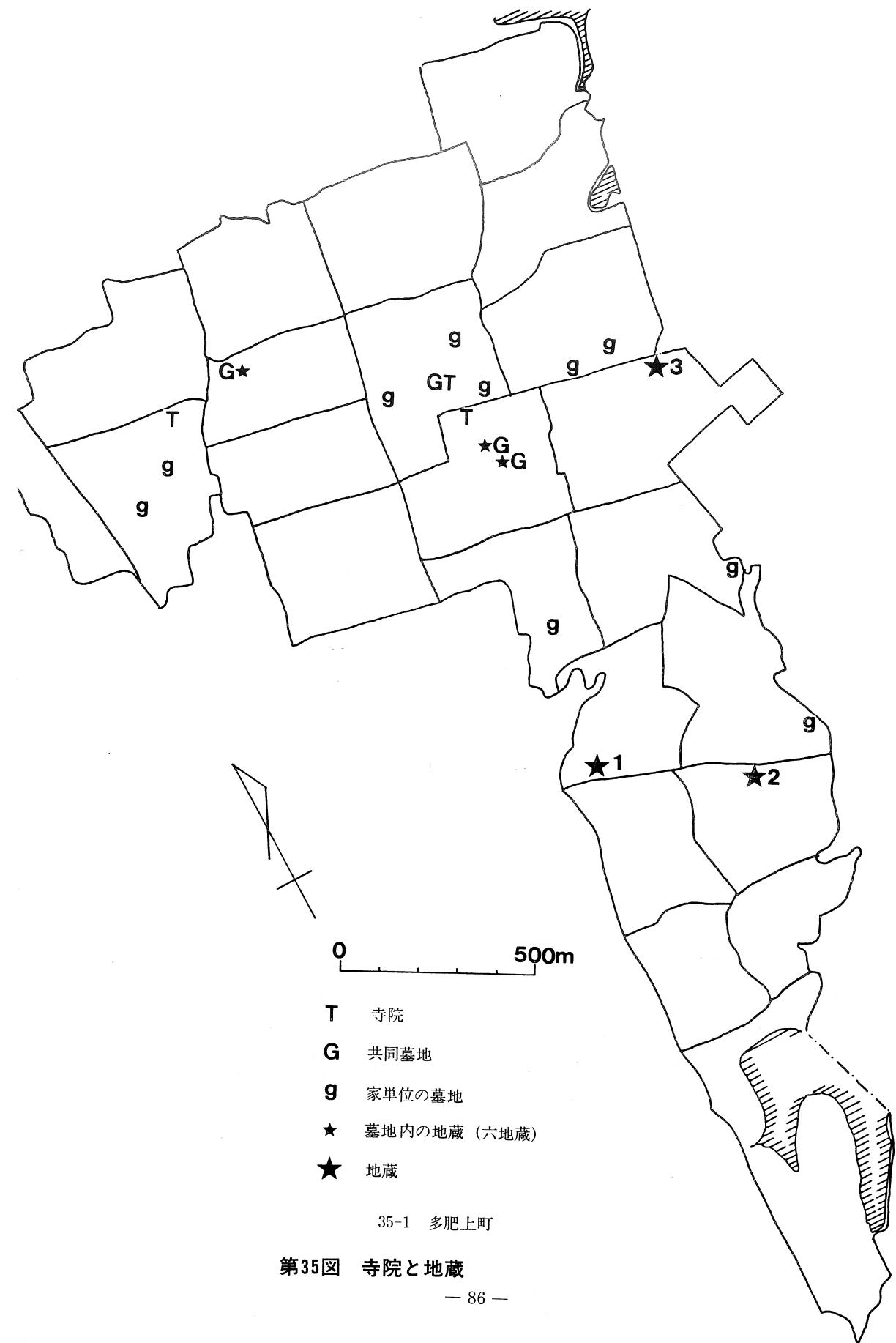


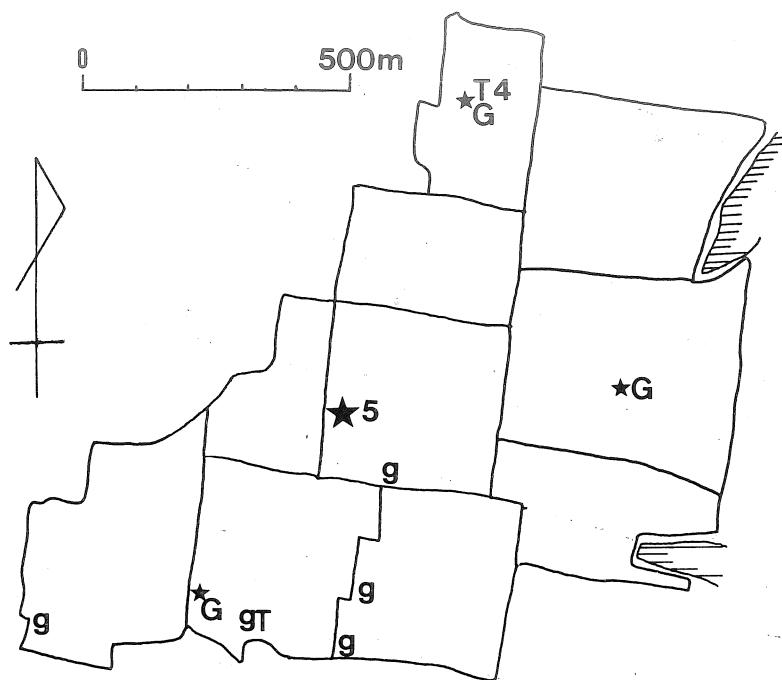
34-2 出作町

4. 寺院・墓地・地蔵尊（第35（1～3）図参照）

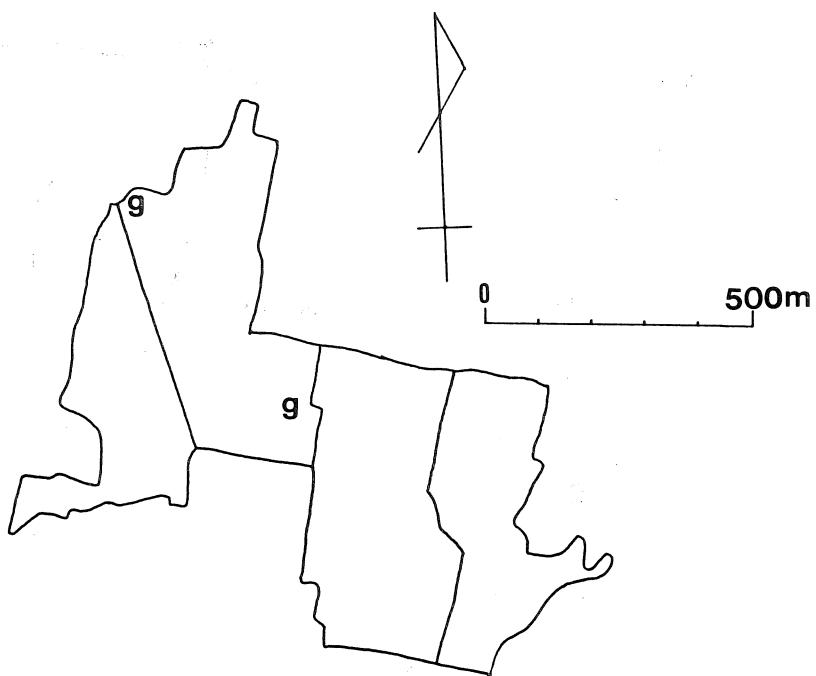
多肥地区の寺院は他地区の人々との関連が深い。たとえば多肥下町の大宣寺（4、浄土真宗）の本堂庫裡の改築（大正7（1918）年）の寄付は下多肥村以外の25地区に及ぶ。逆に上多肥村の人々の旦那寺は高松平野一帯に及び、明治2（1879）年の宗門改帳によれば村外52寺が人々の旦那寺であった¹¹⁾。つまり寺院は伝統的にムラの領域を越えて機能すると考えて良い。

また家屋敷が散在するこの地方では、共同墓地が比較的少なく、家（一族）ごとの墓地が散在する傾向があり、多肥地区も例外ではない。

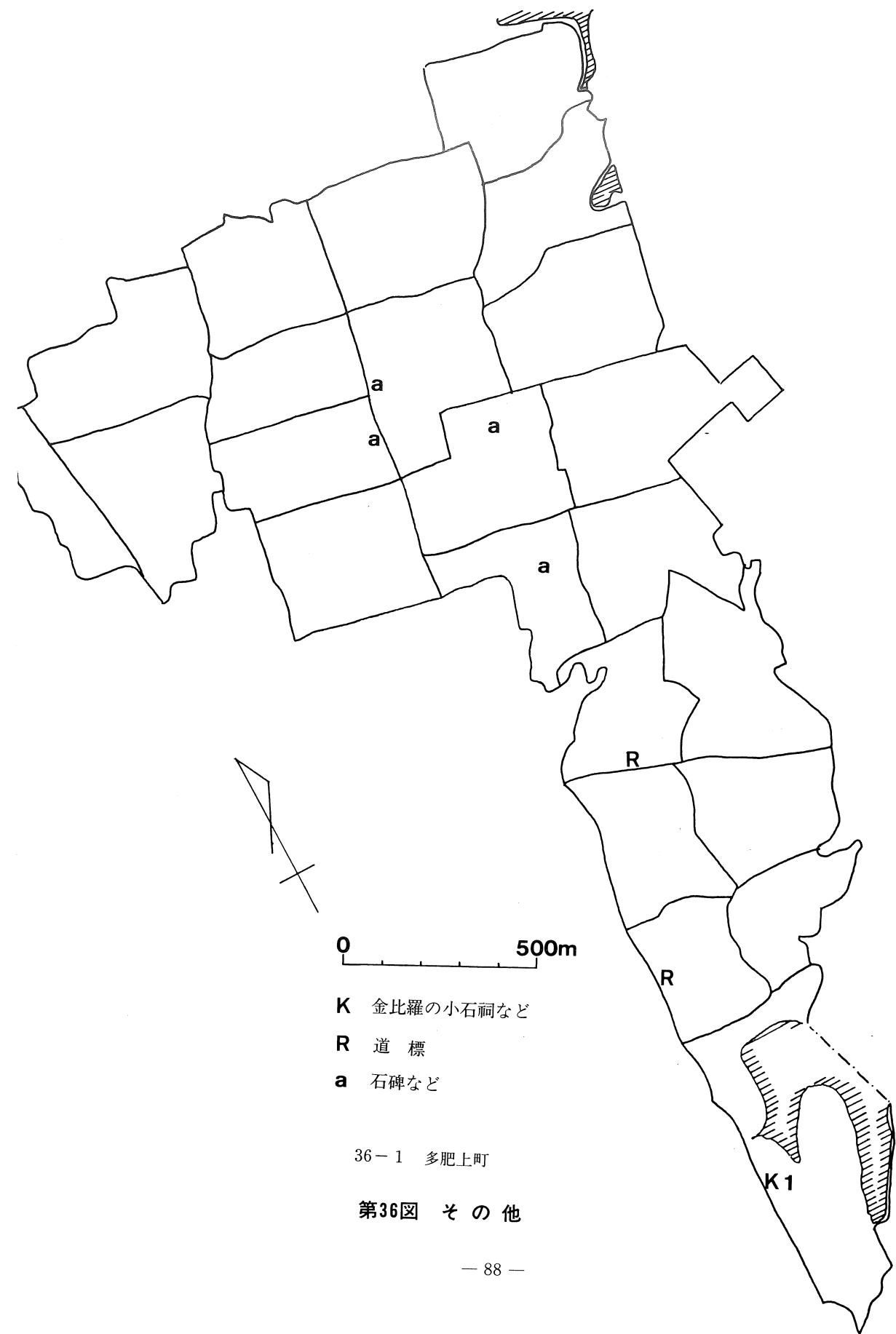


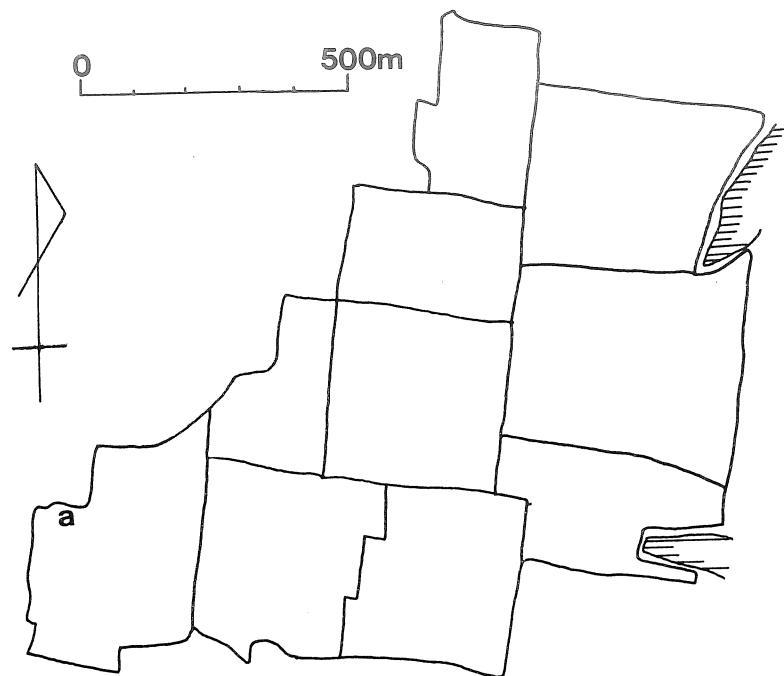


35-2 多肥下町

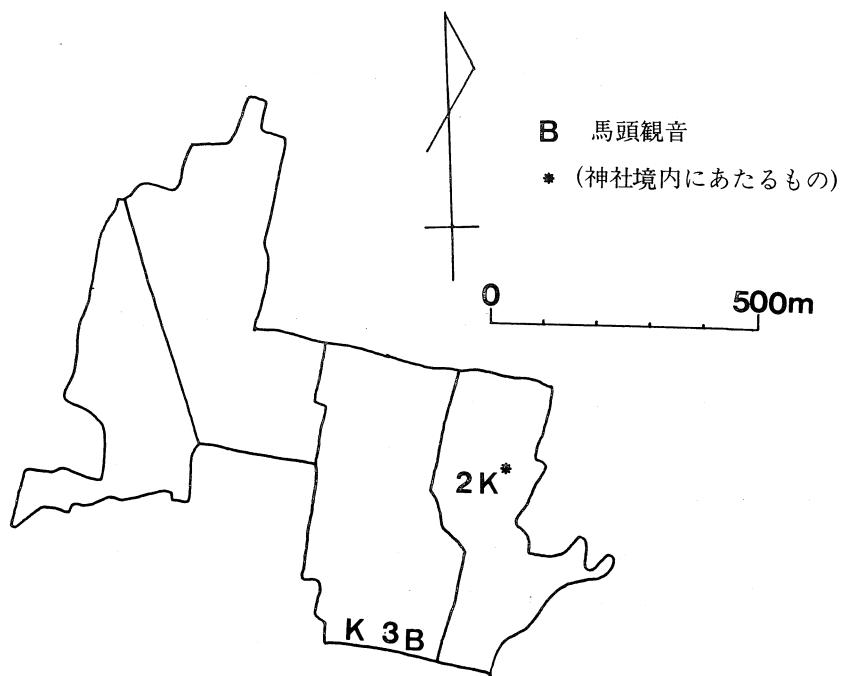


35-3 出作町





36-2 多肥下町



36-3 出作町

地蔵尊に関して言えば、六地蔵が共同墓地に、その他の地蔵尊は街道沿い（1・2）や集落のはずれ（5）に位置する。それらは近世後期以降、移動していないと思われる¹²⁾。

5. その他（第36（1～3）図参照）

街道沿いの金毘羅の小石祠（1）は小田の人々が管理・祭祠（年1回）している。同じ金毘羅の小石祠（2）は熊野神社境内にあり、大正7（1918）年に愛敬神社（小石祠）と合祠され、熊野神社が管理する。

また出作町の馬頭観音は明治11（1878）年に設置されたと言われ、街道沿いに位置する。

その他、石碑はいずれも戦後の記念碑なので省略する。

6. おわりに

本報告では多肥地区の祭祠的な空間構成を免場などムラの領域との関連で粗描してみた。やはり神社・地神塔がこの地区のムラを記述する際、重要であると考えられる¹³⁾。最後に今後の課題を提示したい。

まず祭祀の内容、特に組織の実態を過去に遡る方向で調査する必要がある。また祭祠組織以外の社会組織にも同じ視点で注目しなければならない。そのために、よりミクロな視点から聴き取り・文書の調査を行わなければなるまい。

いずれにせよ高松市域さらには香川県のムラの研究は非常に少ない。また讃岐の免場について不明の点が多い。報告者は歴史地理学ないし社会地理学の立場から、讃岐のムラのケーススタディとして、高松平野南部のムラを継続して考えてみたい。

註

- 1) 拙稿「太田地区周辺の民間信仰的ランドマーク」「村落社会へのアプローチ」『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』I・II高松市教育委員会、1988・1989年、65-75頁・75-80頁
- 2) この基礎的作業はムラを空間論として把える場合、不可欠であろう。たとえば村武精一『祭祀空間の構造－社会人類学ノート－』東大出版会、1984年などを参照のこと。
- 3) 現在、多肥上町の北西部の字名として南原・平塚・松ノ内がある。一方『免名録』には上多肥村と隣接する免名及び小地名として南原・南原下所および平塚・松ノ内がある。しかし近世後期以降、村境の変更はほとんど無いと考えられ、また太田上町に西原・松ノ内という字があるので、上記の3字名は太田村の旧地名と無関係と考えられる。
- 4) 多肥郷上史編集委員会編『多肥郷土史』後編（以下、引用は後編）、1981年、295頁
- 5) 『多肥郷土史』331～333頁、頭屋の単位となる地区は字が複数、連合したものと思われる。

また地区数は免数と一致しないので、免場がそのまま頭屋の地区となったとは考えられない。しかし多肥上町では頭屋の地区は地神塔の分布と一致しているので、桜木神社の頭屋と免場の関係は否定できない。

- 6) 『多肥郷土史』333頁、なお獅子組は多肥上町の向井・上西原、多肥下町の本村、出作町の東部に任じられ（336頁）、また喜多家蔵『氏神八幡宮御祭礼向體人取扱留』（天保15年）によれば獅子の巡行は「出口→西原→向井→野郷→荒→中所」と上多肥村の中だけであったという（337頁）。
- 7) 第33-1図の地神塔で形態的に特筆すべき2例を報告する。5は五角柱ではなく、小石祠の中に五神の名を刻んだ石を封入してある。6は五神の名前が他のそれと異なり、竜田大神・大年神・保食神・御年神・若年神と刻まれる。なお地神塔の形態的特徴については大川郡などの熊田正美の報告がある。熊田「大川郡の地神塔の分布と形態」「香川県東部の地神塔の分布と形態」香川県自然科学館研究報告5・6、1983・84年、54~64頁、53~60頁
- 8) 『多肥郷土史』239頁。他地方の事例であるが、地神が祖先神であり、屋敷神と同じと考えられる場合もある。志浦直子「兵庫県の地神信仰」地域文化2、1975年、74~91頁
- 9) 香川県内の庚申信仰は吉田時義の報告を参考のこと。吉田「香川県中部地域の庚申塔・庚申祠・庚申堂について—塩江町・琴南町の庚申塔を中心に—」「香川県西部地域の庚申塔・庚申祠・庚申堂と庚申講」香川県自然科学館研究報告10・11、1988・1989年、55~62頁・53~60頁
- 10) 『多肥郷土史』470~472頁
- 11) 『多肥郷土史』356~361頁
- 12) すべての共同墓地に近世後期の墓石があり、他の地蔵尊も1は弘化年間（1844~47年）、2は文化年間（1804~14年）、4は文政年間（1818~29年）のものである。いずれも移動したという伝承もない。ただし3の子安地蔵は昭和32（1957）年、他所より移されたという。
- 13) 簡単な報告として次のものがある。
中原耕男「讃岐の地神祭り—地神塔を中心に—」瀬戸内海歴史民俗資料館年報4、1979年、1~11頁